

序 日本 of 読者へ

陳 耀昌

日本の読者のみな様が、この四百年前の台湾開拓物語を気に入ってくだされば幸いです。きわめて奇特で曲折に満ちている台湾の歴史に、きつと驚かれることでしょう。

台湾の島に現れた最初の「政府」は、明帝国でも清帝国でもなく、オランダでした。オランダ人はそれに先立つ一六〇九年、長崎の平戸に商館を設けています。一六二四年、台湾海峡に位置する澎湖島に要塞を築こうとしましたが、明帝国との談判の末、台湾（現在の台南市）へ移り、ゼーランディア城を建造しました。こうして、台湾開拓史が幕を開けました。オランダ統治時代、「フォルモサ」（美しい島）と呼ばれていた台湾には主に三つの民族が暮らしていました。台湾原住民族（フォルモサ人）、オランダ人（主としてオランダ東インド会社）、そして対岸の福建地方から移住した漢民族です。

一六六一年、国姓爺くせんやとも称される鄭成功が、約二万五千の兵を引き連れて渡来し、オランダ勢力を打ち破って以後、フォルモサは漢民族の統治する社会へと変わります。オランダ人がこの島を去っていったのは一六六二年二月九日ですが、それからわずか四か月の後に鄭成功もこの世を去りました。

本小説は、この一六二四年から一六六二年までの物語を描いたものです。

福建地方の漢民族のなかには、十七世紀に入る頃からフォルモサに渡る人々が現れましたが、一時的な滞在である場合が大半で、定住者はわずかでした。海賊（顔思齊がんしせいや鄭芝龍ていしりゅうの部下たち）や、からすみを作るため冬にボラを獲りに来る漁民などです。漢人の数が急速に増えていくのは、オランダ東インド会社が福建で労働者を大量募集するようになる一六四〇

年以後のことです。移民労働者たちはこの島を「大員タイオン」或いは「台湾タイワン」と呼びました。彼らの母語である閩南語閩南語では、この二つの発音は似通っています。

一六八三年、清帝国が鄭成功の打ち立てた東寧王国を征服し、台湾を版図に組み入れました。とはいえ、島全体のおよそ三分の二を占める原住民の居住地域には、その後も統治の手が及ばずにいました。時代が下り、太平洋戦争の時期になっても、アメリカやヨーロッパの報道や地図においては、Formosa の呼称が日常的に用いられていました。

オランダ人は台湾を去りこそしましたが、「歩いた所には必ず足跡が残る」といわれるように、今もなお多方面にその痕跡を留めています。現代台湾人の内、実に約百万人に上る人々が、オランダ人を先祖の一人に持っていると考えられるのです。^(*)オランダの文献によると鄭成功の台湾攻略後、オランダ人女性の一部は將軍たちの側室や召使いにされ、ある者は鄭成功自身の側室となりました。台湾の平野部に居住する一部の漢人が、オランダ人或いは北ヨーロッパ人の遺伝子を受け継いでいるのはこのためです。またその頃、少なからぬ数のオランダ兵が山地へ逃れ、現地の女性と通婚しました。相手は主として阿里山周辺に居住するツォウ族、および屏東三地門周辺に居住するパイワン族とルカイ族の人々でした。このため台湾原住民のなかにもオランダ人を先祖に持つ人々があります。

一方、鄭成功に付き従ってきた二万五千の兵士の大半は独身者で、後に平埔族平埔族（平地に居住する原住民）と通婚しました。このため、多くの現代台湾人が原住民の女性を先祖に持ち、オーストロネシア人の遺伝子を体内に持っています。

台湾の漢人から「開台聖王」と尊称される鄭成功は、日本人の血を半分受け継ぎ、平戸で生まれ育ちました。台南市にある鄭成功祖廟には、平戸市中野観光協会から寄贈を受けた「児誕石」や、母親である田川マツとの親子像が展示されています。「国性爺合戦」など、鄭成功は日本でも古来から芝居の題材とされてきました。

鄭成功の打ち立てた東寧王国が、鄭成功を明朝に与する逆臣と見なす清帝国によって滅ぼされた後も、台湾の人々はずっと彼を慕い続け、公の目に触れぬ形で祭祀を捧げてきました。一八七四年、琉球島民遭難事件に端を発する日本政府の「台

湾出兵」を受けて台湾に派遣された欽差大臣・沈葆楨は、鄭成功を祀る「延平郡王祠」を建立すべく皇帝に上奏文を書き送りました。これは台湾住民の支持を取り付けるため、沈が台湾到着後に行った最初の仕事です。これを境に鄭成功の清朝における立ち位置は一転し、模範的英雄と見なされることとなります。なお日本統治初期の一八九七年に延平郡王祠は「開山神社」と改称され、台湾に設けられた最初の神社となっています。

上述のように、台湾四百年の歴史は、その幕開けからして多民族が混淆する移民社会でした。その後も時代が変わる度、民族も文化も異なる外来者がやってきて、今日に至っています。異なる民族同士が手を携えながら、共にこの島の上で栄えていく。それこそが台湾人の、共通の理想です。

※……台湾で刊行された著書『島嶼DNA』（印刻文学生活雑誌出版、二〇一五年）に詳述。